



佐渡一毅 の ドレッサージュトレーニング

2020年1月～2月

vol.13

前回はフロリダ・ウェリントン遠征中のトレーニングと第1戦について触れましたが、今回はヨーロッパとは異なる馬文化や、第2戦、第3戦についてお伝えします。

✳ ウェリントンの馬術文化

2ヶ月弱の遠征中、ヨーロッパとは違う馬術の文化に驚かされることが多くあったのでご紹介します。

今回 参加しているのは Adequon Global Dressage Festival という競技会で、1月1週目から3月4週目までの毎週、インターナショナルまたはナショナル競技会が同じ会場で行われるツアーです。インターナショナルでは3スター、ワールドカップもしくは5スター、CDIOなどさまざまなクラスの競技会が行われ、それぞれの馬のレベルや目的に合った競技会に好きな間隔で出場することができます。ただし、3スター以上のインターナショナルは隔週で行われることが多く、私たちの滞在期間中は最大で3回の CDI3* に出場することが可能です。

会場は馬場馬術がメインの競技場で、メインアリーナは80m × 40mほどでそれほど広くありません。その裏には観客席をはさんで同じ大きさの準備運動馬場があります。しかし覆馬場（カバードアリーナ）は70m × 100mほどと広く、馬場が3面組まれています。また、一番大きなアウトサイドアリーナは100m × 150mほどあって、ここでは4面の馬場を組んでナショナル競技会が行われます。これらに加えてダービー競技が行われる芝馬場やポロの競技場などがあり、非常に大きな競技会場となっています。しかし、驚いたことはこの競技場の数倍もの大きさの障害馬術競技場がすぐ近くにあることです。障害も同じ時期に毎週競技会が行われていますが、馬場とは頭数も賞金も大きく違い、CSI2* ですら CDI-W と比べ物にならない規模でした。

この競技会場の周囲にはプライベート厩舎が多数存在しています。ウェリントンにはヨーロッパだけでなく、アメリカ全土やカナダからも馬を連れた選手がやって来ます。その多くはプライベート厩舎を持ち、普段はそこでトレーニングをして競技の時に馬を運んで出場するという方法をとっています。しかもその全てが非常に綺麗でお金がかかっていることはひと目で分かり、中には宮殿のような厩舎もあるそうです。このようなプライベート厩舎は、1年のうちこの3ヶ月のためだけに建てられているものがほとんどのようです。

また、障害馬術や馬場馬術の競技だけではなく、ウェリントンはポロも有名で、世界トップレベルのポロプレイヤーが集まっているそうです。私のトレーナーもポロ競技を観戦して「あ



▲プライベート厩舎の覆い馬場

のような世界があるとは驚いた。滞在中に必ず見に行くべきだ」と言うほどでした。

ウェリントンは1月から3月の冬季に（4月～12月は暑すぎて人も馬も滞在していられないこと）人と馬が集まり、そして多くの馬ビジネスが行われています。リッチな人が一気に集まるので、馬ビジネスが盛んになるのは当然のことでしょう。

今回、アメリカの馬文化に初めて觸れました。ヨーロッパの文化には敵わないだろうと思っていましたが、このスケールには本当に驚きましたし、オランダから来たトレーナーたちもまるで異世界だと驚くばかりでした。

✳ ウェリントン第2戦

第1戦の2週間後、1月22日～26日が第2戦でした。前回より参加頭数が増えた中、Ludwig と Barolo の2頭とも怪我も治り、前回からの上積みを感じられる状況で第2戦を迎えました。

Ludwig は前回（3月号）紹介した「馬に譲らせる」ことを常に意識した騎乗を心がけました。競技ではまだそれが有効か自信はありませんでしたが、その効果は大きく、結果として馬を常に自分の前に置いた状態で演技ができ、駆歩区間のミスは大きく減りました。



▲ Ludwig はこれまでと比べても馬の全体的なフレームにも変化が見られた

スコアも70.717%と自己ベストを獲得することができました。2日後のグランプリスペシャルは、速歩・駆歩は良い状態で演技ができましたが、ピアップ・パッサージュの一連の運動では馬のクオリティ任せになってしまいました。それでも大きなミスはなくここでも70.532%と好評価を得られました。また、今回唯一の5スタジヤッジだったドイツの Katrina Wuest さんから70%をつけてもらえたことはとても自信になりました。東京オリンピックでは

審判団長を務める方なので、チームのためにも本番に向けて良いアピールになったのではないかと感じています。

Barolo は準備運動では過去一番の状態だと感じていたのですが、1回目と2回目のピアップで脚に全く反応しなくなってしまい、ステップがほとんど止まってしまい、成績は64.391%となってしま

まいました。見ていたトレーナーも乗っていた私も明確な原因が分からなかつたのですが、一つ考えられることは、1回目のピアッフェ直前のパッサージュ中にアリーナ周りのVIPレストランから何かが割れるような大きな音がして、それに一瞬気

を取られたことです。ここで、パッサージュが乱れたりはしませんでしたが、本当に僅かに集中力が乱れた感触はありました。最近、Barolo は周りを見るような素振りをすることが多くなっています。内にこもることが多かつた Barolo にとって、外に気を取られることは良いサインと捉えていたのですが、今回はそれで集中を乱し、人の指示に対して従順さを欠く状態になった可能性があったため、今後はこのような小さなサインでも見逃さないように対処しなければならないのではないかという結論に至りました。この会場ではインターナショナルと並行してナショナル競技も毎日行われているため、Barolo は今回の問題点の確認及び修正のため、3日後のナショナル競技のグランプリに出場することにしました。馬は絶好調でしたが、こちらは油断することなく、馬の注意が外に向いたときは内方姿勢を要求するなどして人に集中させるように意識し続けたところ、これまで一番良い内容の演技ができました（69.130%）。



▲第2戦は Ludwig が活躍

✿ ウェリントン第3戦

ウェリントン遠征の最終戦は2月5日～9日の CDI3* と CDI-W でした。2頭ともフレッシュな精神状態を保っていましたが、身体的な疲労が少し溜まっているため、競技のない週は休養もしっかり入れてトレーニングとのバランスを取るように努めました。

Barolo は CDI-W に登場しました。気温が30度を超える中、暑さ対策もうまくいって競技直前にピークに持っていくことができたのですが、ここでアクシデントがありました。前の出番の選手への歓声と拍手、さらに風にあおられた VIP テントがバタバタと音を立てていたため、入場前に馬が興奮して收拾がつかないほどの状態になってしまいました。しかし非情にもベルが鳴らされてしまったので、45秒ができるだけ長く使って入場、前半は抑える演技となってしまいましたが、馬の集中力を切らさないよう努め、Ludwig 同様に体全体を譲らせることを意識した騎乗を心掛けたところ Barolo とも初めて70.261%を獲得することができました。結果もそうですが、馬の競技直前の興奮状態からミスなく演技をまとめられたことに、トレーナーを含めた関係者、さらには面識のない観客からも褒めてもらえ、騎乗者

としてはとても嬉しい評価をしてもらいました。翌日の自由演技はナイターでした。馬はとても良い状態だったのですが、私自身が競技の雰囲気に少しエキサイトしてしまい、集中力を欠いていくつかミスをしてしまいました。71.555%とあまりスコアを伸ばすことはできませんでしたが、5スタージャッジを含めた3人のジャッジから73%以上をつけてもらったので、今回のようなミスをしている場合ではないと気を引き締め直しました。

Ludwig は前日のトレーニングまでは非常に良い感覚を得ていましたが、当日の準備運動後半、伸長速歩に少し違和感があり、競技が始まつてからも前回とは手応えが異なり、左ハーフバスで大きなイレギュラーが起きました。跛行というほどではなかったので最後まで演技を続けましたが、駆歩区間でも本来の動きを見せることができませんでした（65.239%）。競技後、獣医師に診てもらったところ、右前肢球節外側の腱に炎症が見られるということで、よほど大事な競技でない限り2日目は棄権するべきと勧められたため、棄権することにしました。今後の不安材料となってしまいましたが、幸いにも治療にかけられる時間はまだあるので、まずは完治を目指して治療に専念することになりました。



▲競技直前の Barolo とトレーナーの Imke

✿ まとめ

今回のウェリントン遠征では、年末にアメリカに入り7週間の滞在中に競技会に3回出場しました。これほどの短期間に3回も競技に出場したことは初めてで、調整が難しい部分や不安もありましたが、大きな収穫を得られた遠征となりました。オリンピックイヤーの今年は競技成績が求められるシーズンになりますが、2頭ともベスト2の成績の平均は69%と良いスタートが切れたので、4月からの競技でさらにスコアを伸ばしていくけるようしっかりと準備をしていきます。



▲第3戦は Ludwig にとっては不運な結果になってしまったが、それでも何とか無事にアメリカ遠征を終え、大きな収穫を得てヨーロッパに戻った